

オースティン・サール VS. デリダ —サール＝デリダ論争の脱構築的・哲学的考察—

岩 本 一

〔1〕はじめに

デリダ＝サール論争は「コミュニケーション」や「哲学」などの分野に多大な影響と波紋を投げかけた。ことの起こりは、1971年8月、カナダのモントリオール大学で開催された「フランス語圏諸哲学会国際会議」で口答発表された「署名 出来事 コンテキスト」が1976年に英訳された際、サールがデリダに異議を申し立てたところから始まった。

デリダは、「署名 出来事 コンテキスト」（余白一哲学）についてのテキストの第二、第三章のなかでオースティンの「言語行為論」に対する脱構築的批判を提出した。これに対して、サールは、「差異ふたたび：デリダへの反論」（1977年）で、デリダのオースティン理論の理解にいくつかの「誤解」があり、デリダ論の甘さを厳しく指摘し、批判を展開した。これに対して、デリダは、再反論の答弁として、「有限責任会社abc」（1977年）を発表し、サールの反論のほとんど全文を引用しながら、その背後にある「言語行為論」を脱構築した。その後、サールは、デリダ論に対して、公に再反論を加えることはなかったが、カラーの「ディコンストラクション。」（1982年）の書評として「ひっくり返された言葉」（1983年）の中で、デリダの「脱構築的哲学」に対して自らの立場の優越性を確認しようとしている。

この論争は、さらに広がりを見せ、ヨーロッパ大陸でもコミュニケーション的行為理論のハーバマスも「近代の哲学的言説」（1985年）のなかで、サール寄りの立場をとり、アーベルやフーコーとの関連を示し、また解釈学的哲学者のフランクも「言語エントロピー：サール＝デリダ論争のための考察」

(1980年)でデリダ寄りの論考を、ガダマーやリクールとの関連で発展させた。英米においても、「哲学的」並びに「脱構築批評」にもこの論争に関する議論を含んでいる。つまり、前者として、ステータン「ウィットゲンシュタインとデリダ」(1984年)やローティの「ディコンストラクションと迂回」(1985年)等、後者として、カラーの「ディコンストラクション」(1982年)等に見られる。もちろん、日本語の「コミュニケーション」の場でも様々な効果を発揮している。⁽¹⁾

このように、この論争は、その置かれているコンテクストの広がりをも十分に示唆している。この稿では、サール＝デリダ論争を脱構築的・哲学的にアプローチする。

〔2〕脱構築的・哲学的考察

2.1 「署名 出来事 コンテクスト」

この論文を契機にしてデリダ＝サール論争が始まった。この論文は、オースティンの発話の遂行性の理論を論じたものである。オースティンによれば、言語は、事実の陳述とか論理的な陳述とかに使うのがすべてではなく、さまざまな目的に使われるのである。それは、約束とか、結婚の宣言とか、儀礼的に何かを命名するなどのようにある種の修辭的な行為を遂行するのに使われる。さらに署名のように、「私はここに・・・」という形式をもったものもあるし、コンテクストにその意味を依存することもある。例えば、「わたしはうなぎだ」という発話行為も「そばや」でオーダーする場面を想定すれば理解できる。それが事実の陳述とちがうのは、そこに意図が、つまり発話行為にともなう「発話内的な力」があるからと、オースティンは述べている。

オースティンは、さまざまな発話内的な力を説明する際に遂行的な発話行為を妨げる条件を次のように述べている。⁽²⁾

これらとは、違った種類の、すべての発話を冒す病いがある。そし

てこの病いも他と同様に、当面は意識的に排除することにした。ただし、再びより一般的な考察の対象とすることはあるかもしれないが。例を挙げるなら、つぎのようなことである。遂行的な発話は、もしも、たとえば舞台の俳優が口にしたり、詩にあらわれたり、独り言だったりするときは、奇妙に空虚であることがある。これはどのような発話にも同じように当てはまる一特殊な状況下で起こる変則例である。そうした状況における言語は—それと容易に分かるけれども—特別な仕方で、真面目には用いられていない。それは、言語の正常な用法に対して寄生虫的に、言語の類発を扱う学問の分野に含まれるべき仕方で用いられている。これらすべてを、ここでは考察から排除することとする。ここで扱う遂行的な発話は、成功している、いないはともかくとして、通常状況で発せられたものと解していただきたい。（『言語と行為』）

このように、オースティンは、言語の真面目でない使用法は、通常の言語に付加され、それに全面的に依存する何か余分なものと考えられ通常の言語を論ずる際に考慮に入れる必要はない、寄生虫にすぎないのだと考えた。

サールもまたデリダへの反論の中で、この排除をたんに暫定的なものにすぎないと言う。

オースティンの考えたのはたんにつぎのようなことだ。もしも、約束をするとか意見を陳述するとかいうことがどういうことなのかを知ろうとするならば、その研究を、劇を演じている舞台の役者のする約束や、小説にあらわれる人物の性格について小説家の行う陳述などから始めないほうがいい。なぜなら、そうした発話が約束や陳述の標準例ではないことは、かなり明瞭であるからだ……。論理的に優先されるべき「真面目な」言説についての一群の疑問に答

えるまでは、寄生虫的な言説についてのもう一群の疑問はしばらく未定にしておくべきだと、オースティンは正しく見抜いていたのである。(『差異の再説』)

デリダは、このような発話行為についての考え方を「エクリチュール」と考えずに「パロール」を特権化した典型例だとみる。オースティンは、遂行的な発話が適切なものになるには、話し手が発話に関与し、その趣旨を本当に意図していることが条件であるという。しかし、デリダはこれに対して、遂行的な発話行為とは、最初にあった想定（現前）される意図の力がもはや存在しない様々の状況やコンテキストにおいて妥当し、含まれていると言う。⁽³⁾つまり、遂行的発話行為は、話し手が、発話する以前に、すでにコード化された発話形式と目的を体現しているから機能的意味を持つことができるのである。つまり、「反復可能性」である。「もしも、遂行的な発話に用いられる形式が反復可能な発話を繰り返すものでなかったら、その遂行的な発話が成就することがありうるだろうか？」(『哲学の余日』)。それは、舞台の上の俳優の演技を考えると、「真面目な」遂行的な発話がなされうるか否かは、演技がなされうるか否かにかかっている。従って、オースティンが適切な遂行的な発話行為を行うには、発話の瞬間に意識に現前する、意味する意図としての意味という概念を導入する必要性がある。⁽⁴⁾これはノリスによれば、「デリダのいう意味でのエクリチュールに、各個の発話に現前する意図とは決して一致することのない差異からなる体制に、帰属することとなる」のである。つまり、それは、「みずからの意図のみずからに余すところなく現前させる意識が、ある発話行為の意味を究極的に決定し、根拠づけることになる」とカラーは言う。

このように、オースティンは遂行的な発話を成功させるために「不真面目」なものを排除したがるまいといったのであろうか。デリダは、次のように問うている。

オースティンが変則、例外、「不真面目」、(舞台上での、詩あるいは独白のなかでの) 引用であるとして除外したものを見て、それなくしては「うまくいった」発話行為すらありえないはずの引用可能性一般が—というか、反復可能性一般が—決定的に手直しされたのだと言えるだろうか。(デリダ：差異の再説 p191)

この問いに対して「署名」を例にとって考えてみよう。署名というのは、のちのちの義務その他の効果の根源をなす意識への現前の瞬間がひそんでいるようである。なぜなら、その効果が反復可能性に依存しているからである。デリダは、次のように書いている。

「こうした効果を可能にしている条件は、ここでもまた、同時にこうした効果を、そしてこうした効果の厳密な純粋さを不可能にしている条件でもある。機能を有するためには、すなわち読みうるためには、署名は繰り返しうる、反復可能な、模倣可能な形式を備えていなければならない。それは、それが作り出されたさいに現前した、唯一の意図だから分離可能でなければならない。署名の唯一性、自己同一性を毀損することによってそれを署名たらしめるものは、他の署名との類似である。」(「署名 出来事 コンテキスト」)

たとえば、小切手⁽⁵⁾に適切な署名ができるのはあらかじめの同意に基づく信用関係があるからである。しかし、そのためには、常に詐欺やごまかしにあらう危険にさらされるのである。それは、言語が「額面通りの意味を持つ」とは限らないことが多いのと同じである。もちろん我々は、日常会話では言語の額面通りの意味の有効性を疑うことはないが、しかし、オースティンのように、言語のもつ約束事を基準に哲学全体を組み立てるには、小切手の署名のように厳密な点検が必要となる。このように署名という例も、他の発

話行為の場合に出会ったのと同じ構造を提示してくれる。その構造は、(1) 約束事的な要因とコンテキスト的な要因とに意味が依存していること、しかし、(2) 発話の力の限界を特定するために、ありうるコンテキストの可能性を網羅することはできないこと、(3) 理論によって意味作用の効果や、言語表現の力を制御するのは不可能であることである。したがって、いかにオースティンが様々な発話行為の遂行の条件を目録化しても、意味はコンテキストに依存しており、コンテキストは無限なので、彼の理論で署名は、デリダのいうところの「反復の諸形態の分類学」に含めなければならない。

そのような分類学にあっても、意図というカテゴリーは、消え去りはしないだろう。それはそれなりの位置を与えられるだろうが、その位置から発話体系の全場面を支配することはもはや不可能だろう。なによりも、そうなれば私たちは様々のしるしやしるしの連鎖を扱うことになるので、引用される発話と唯一独自の出来事的な発話という対立は扱われなくなるだろう。このことのまず、第一の帰結は、次のようなものだろう。この反復の構造にあって、発話に生命を与える意図が、みずからに、そしてみずからの内容に完全に現前することは二度とないということ。この意図を構造化する反復によって、発話にはア・プリオリに一つの本質的な裂開・割目が導き入れられるということ。(「署名 出来事 コンテキスト」)

2.2 「差異の再説：デリダへの反論」

2.1で述べたデリダの脱構築的批判に対してサールは、「差異の再説」の冒頭で次のように述べている。

その原因は、デリダがオースティンの言語論の中心的主張を論じていないということに帰されるべきではない。むしろ、以下において

私が明らかにするように、デリダが自分の議論のきわめて重要な若干の箇所においてオースティンの立場を誤った形で理解、紹介していることこそが原因である。かくして、哲学的伝統の対決などはまったく存在しない。〔差異の再説〕

サールの議論によると、話し手は生来の言語能力をもっており、それによって無限の発話を生み出すことできる、というチョムスキー理論を利用していうのである。サールは、デリダの遂行的な発話行為は反復可能性である、という議論を逆転させて、「言語形式は反復可能だから、発話行為の特徴であるさまざまな意図表現を容易にし、その必要条件となるのだと」と切り換えた。次に、サールは、「エクリチュール」とは作者の意図がそこにあって参照できようができまいが、たいていの書かれたテキストが基本的に了解できる点をデリダが無視している、と批判した。さらに、サールは、「発話行為は引用の可能性一般（あるいは、エクリチュール）に浸透されていて、そのためにオースティンの除外した逸脱例と同じ「寄生性をもつ」ことになる」といってデリダの主張をしりぞける。なぜなら、コミュニケーションの能力は、話し言葉も書き言葉も同じ役割を持つのであって、それによって読者は標準的な解釈の規則を応用して、意図通りの結論にたどりつくことができるから。⁽⁶⁾

このように、二人のやりとりには意見の一致は見られない。というのは、サールは、言語はコミュニケーション能力があるといい、一方、デリダは、コミュニケーションは決定不能の領域に通じていて、そこではコンテキストとか約束事を持ち出しても言語の自由な戯れは止めることができないという。サールは、自説を証明するために次の例をあげる。

「1793年9月20日、私はロンドンからオックスフォードに向かって旅にでた」〔差異の再説、P.20〕

この文の作者もその意図もすでに消滅しているにもかかわらず、この文章は直接にコミュニケーションしている。つまり、この文章は、コミュニケーション能力を有しているとサルは言ってデリダに反論した。しかし、この種の文章は、脱構築者たちが好んで脱構築するテキストである。たとえば、バルトが引用する短い電文「アス、ゲツヨウ、カエル、ジャン ルイ」はサルの引用文同様に単純明快に直接コミュニケーションしているが、この電文の中のジャン ルイは、どのジャン ルイの話なのか、またこの電文が書かれたのがどの日曜日なのか曖昧で、決定不能の領域を自由に戯れているだけである。言語は、いたるところで逸脱し、安定した意味の秩序におさまることはできないのである。⁽⁷⁾

最後に、サルは、デリダが反復可能性と永続性を混乱させているという。

反復可能性という概念をこのテキストの永続性という概念と混合しているということである。彼の考えによれば、私が著者の没後にその著作を読むことができる理由は、その作品が反復可能であるからということである。たしかに、その著作がさまざまな形で現れることによって、それを読むことがはるかに容易になるということは疑えない。しかし、テキストが存続するという現象とテキストが反復されるという現象とは同一のことではない（「差異の再説」）。

しかし、テキストは、「エクリチュール」でも「パロール」でも本質的に同じなのである。したがって「エクリチュール」は、記号がそれを発した主観の消失以後も機能し続けるという記号の持続的機能をもっている。そしてすべての記号が「エクリチュール」であれ「パロール」であれ、不特定の他者によって反復が可能である。よってテキストの存続と反復の現象は同一である。

2.3 「有限責任会社abc：サールへの再反論」

この論文の中で、デリダは、サールの議論の背後にある論理と暗黙の前提とをくつがえすためにあらゆる手段を取った。この論文のタイトルにもあるように、タイトルは「有限責任」(会社)または、(法人)を表し、誰か合法的に作者の名前をかかげることによって所有し、支配し、限定し、私有することができるのである。サールが、デリダが発話行為の哲学を誤解し、「デリダのいうオースティンは・・・原形とはほとんど何もつながりもない」と指摘したことに関してデリダは、「オースティン」という名がテキスト群につけられたり、オースティンという人物の現前する存在やその同調者たちの存在が、テキストの読みに力を振るっている限り、発話行為の約束事そのものがその適用に制限を加えたり、適用するとつじつまが合わなくなるまで、テキストにそって、オースティン派を脱構築するのである。

もともと脱構築は意味を規定して、その発見法を教えてくれる理論ではない。それは、諸々の理論にある階層秩序的な対立を批判的に解体し、作者の意図とか、約束事の決定とか、読者の体験とかによって一義的に意味を規定しようとする理論一般の困難を示すものである⁽⁹⁾。だから、オースティンが遂行的な発話と事実確認的な発話を二種類の特定の原理によって区別することは難しいのである。なぜなら、これまで、この区別は、発話行為のタイプ間の差異として取り扱われてきたが、実は、ひとつひとつの発話行為の差異だったからでる。⁽¹⁰⁾

記号が我々の志向(意図)から離されうるという構造的可能性は他の人によって反復される可能性である。我々が志向(意図)に対する構造的不透明さの部分と認めると、記号が新たなコンテキストにおいて反復される際に、記号の意味が部分的に異なった規定を受けることを認めなければならない。つまり、反復においては、反復される同一性は、必然的に他化される⁽¹¹⁾。したがって、オースティンが意味を決定するコンテキストを規定しつくすことは不可能である。つまり、誰かが「一七九三年九月二〇日に・・・等々」と言っ

たり書いたりしようとするまさにその瞬間に、(心的なそれであれ、音声的なそれであれ、文字的なそれであれ、すべての) マークがその瞬間を越えて機能することを保証するであろう当のもの、すなわち、別の機会にも反復されうるという可能性が、志向(意図)の、意味作用(言おうと欲すること)の、ましてや(afortiori)意味と発音との合致の、「理想的」な充実性ないしはく自己への現前性>を損い、分割し、収奪している。反復可能性は、それが同一化し反復可能にする当のものを他化し(変質させ)[alter]、それに寄生し、それを汚染する。我々はこの反復可能性によって、自分が意味する(言おうと欲する)こととは別のことを(すでに、常に、同時に)意味する(言おうと欲する)ことにならざるを得ない。([「有限責任会社、p200」])

次に、デリダは、オースティン・サールの使う不真面目、寄生、褪化、腐敗といった言葉使いの中に、反語的、隠喩的、虚構的言語に対する倫理的断罪を見る。

最も伝統的な形而上学がオースティンの遺産を支配している。……そのことは、次の二つの指標によって明らかである。1. 現実には見出しえない一つの理想的極限の周囲に、単に諸価値を対立させるのみならず、それらの一方を他方に従属される、階層化的価値論ないしは倫理的-存在論的区別(正常/異常、本来的/寄生的、充実した/空虚な、真面目な/不真面目な、字義通りの/字義通りでない、要するに、肯定的/否定的、理想的[イデア的]/理想的[イデア的]でない)……。2. 単純、無傷、正常、純粹、本来的と見なされた一つの起源、一つの「先行性」に、「戦略的」かつ理念的に遡り、しかるのちに、派生、複雑化、墮落、偶有性(付帯性)などを考えようとする企て。プラトンからルソーまで、またデカルトからフッサールまで、あらゆる形而上学者はこのようにして、悪の

前に善を、否定性の前に肯定性を、不純性の前に純粋性を、複雑性の前に単純性を、偶有性（付帯性）の前に本質を、模倣するものの前に模倣されるものを、考えようとしてきた。これは、数ある形而上学的所作のうちの単なる一つではなく、最も持続的、最も根本的、最も強力な形而上学的要求に他ならない（有限責任会社 p.236）。

オースティンの言説が、「或る種の道徳的判断を含んでいる」というデリダの議論にサールは、そのような寄生性は一つの論理的依存関係であるから、道徳的判断を含意していないと主張した。しかし、「署名」のところで論じたようにオースティンは、法人を表しているので批難をまぬがれないでしょう。

記号は構造的に志向（意図）を超越し、それ自身の道を辿るのでそれらの言葉の使用は、我々自身を何らかの仕方では拘束するようである。例えば、「いったいいかなる論理学者が、＜BはAに論理的に依存する。したがって、Bは寄生的、不真面目、異常 等々である＞などと言うだろうか」（有限責任会社、p235）。

では、なぜオースティンもサールもこのような言葉を使用するのか？

デリダによると、彼らは現前性を自分の企ての中に再び導入しないからである。導入すれば、「みずからの意図をみずから余すところなく現前させる意識がある。発話行為の意味を究極的に決定し根拠づけることになる。デリダの読みは、この現前性の再導入がおこる瞬間に集中する」（カラー、『ディコンストラクションⅠ』）。つまり、デリダにとって、話し手の意図することの十分な志向的現前の可能性は、記号の本質的構造である反復可能性によって排除されている。これは、「この反復可能性がすでに発話の瞬間から、記号が話し手の意図によって完全に浸透されることを構造的に不可能にしているのである」（『ウィントゲンシュタインとデリダ』）。

[3] おわりに

以上、デリダ＝サールの論争を哲学的・脱構築的に考察してきた。デリダによれば、オースティンの言語行為論は、現象学と基本的には同一の諸前提に依拠している。これらの諸前提の中心をなすのは、「行為遂行的発言の実践に参加する話し手および聞き手の意識的現前性」や「この操作の全体への彼らの意識的かつ志向的な現前性」、これらの現前性は、目的論的に、いかなる残余もその現前的全体化を免れず、いかなる還元不可能な多義性も、その意味の統一性の地平を脱しえない、そのような現前性（『空白の哲学』p.322）。いわゆる、ヨーロッパ大陸の形而上学がオースティンの価値を支配している。

注

1. 現代思想、デリダ pp6～11
2. Ch.ノリス、荒木正純他訳、1985、ディコンストラクション、勁草書房 p171
3. Ibid: p171
4. J.カラー、富山太佳夫他訳、1985、ディコンストラクション。．岩波現代選書、p187
5. Ch.ノリス、ディコンストラクション p173
J.カラー、ディコンストラクション pp203～208
6. Ibid:, p174
7. Ibid:, p175
8. Ibid:, pp177～8
9. Ibid:, p213
10. Ibid:, p217
11. H.ステータン、高橋哲哉訳、2004、ウィントゲンシュタインとデリダ、p241
12. Ibid:, p247

参考資料

1. 現代思想、臨時増刊 1988 デリダー言語行為とコミュニケーション、青土社
2. J.カラー、富山太佳夫／折島正司訳、1985 ディコンストラクション I、岩波現代選書
3. Ch.ノリス、荒木正純・富山太佳夫訳、ディコンストラクション、勁草書房
4. H.ステータン、高橋哲哉訳、1987 ウィントゲンシュタインとデリダ、産業図書
5. J.デリダ、高橋哲哉、増田一夫／宮崎裕助訳、2004 有限責任会社、法政大学出版
6. J.ハーバマス、三島憲一他訳、1999 近代の哲学的ディスクール I、岩波書店
7. 現代思想、ローティ、篠沢・大河内訳、1985 ディコンストラクションと迂回、青土社

